

原 著

リエゾン精神専門看護師の必要性に関する実態調査

The necessity of a psychiatric liaison nurses

齊藤 萌子¹⁾, 尾蔵 清佳¹⁾, 齋藤 夏絵¹⁾, 新井 里美¹⁾
岡田 久美子¹⁾, 田中 浩二¹⁾, 長山 豊¹⁾, 谷本 千恵²⁾
今井 さつき³⁾, 竹内 陽子⁴⁾, 河村 一海⁵⁾, 長谷川 雅美⁵⁾

Moeko Saito¹⁾, Sayaka Ozoo¹⁾, Kae Saitoo¹⁾, Satomi Arai¹⁾,
Kumiko Okada¹⁾, Koji Tanaka¹⁾, Yutaka Nagayama¹⁾,
Chie Tanimoto²⁾, Satsuki Imai³⁾, Yoko Takeuchi⁴⁾,
Kazumi Kawamura⁵⁾, Masami Hasegawa⁵⁾

¹⁾金沢大学大学院医学系研究科・²⁾石川県立看護大学

³⁾石川県立総合看護専門学校・⁴⁾石川県立高松病院・⁵⁾金沢大学医薬保健研究域保健学系

¹⁾Division of Health Sciences, Graduate School of Medical Sciences, Kanazawa University

²⁾Ishikawa Prefectural Nursing University

³⁾Ishikawa Prefectural School of General Nursing

⁴⁾Ishikawa Prefectural Takamatu Hospital

⁵⁾Faculty of Health Sciences, Institute of Medical, Pharmaceutical and Health Sciences, Kanazawa University

キーワード

リエゾン精神専門看護師, 心のケア, 必要性, 期待される役割

Key words

psychiatric liaison nurse, mental care, need, prospective role

要 旨

本研究は、患者・看護師それぞれ双方から見たリエゾン精神専門看護師（以下リエゾン看護師）の必要性、及びその期待する役割の2点を明らかにすることを目的とし、A大学附属病院の患者476名、看護師327名を対象に自己記入式質問紙による調査を行った。その結果、リエゾン看護師が必要であると答えた看護師は93.4%、患者は68.5%で、差はみられたものの、患者・看護師ともにリエゾン看護師を必要としていることが明らかとなった。さらに、患者は疾患に関する悩みや不安を多く持っており、心のケアの専門的知識と医学的知識双方からの精神的なサポートをリエゾン看護師に期待していた。また、看護師は介入したくてもできない心のケアにリエゾン看護師に介入して欲しいという思いが強く、専門的知識・技術を用いた丁寧な関わりを期待していることが明らかとなった。本研究結果から今後のリエゾン看護師の専門職としてのあり方が示唆された。

Abstract

This study was aimed at clarifying necessity of psychiatric liaison nurses (liaison nurses) and prospective role about them. We used a self-completed questionnaire for 476 patients and 327 nurses of an a university hospital and conducted this investigation. As a result, the nurses were 93.4% and the patients were 68.5% about the necessity of a liaison nurse. We understood that the patients and nurses hoped that a liaison nurses worked in a hospital.

These patients had a lot of sick trouble and anxiety, so they wanted liaison nurses to care about with technical knowledge for mental care and medical knowledge.

On the other hand, the nurses strongly thought that they wanted a liaison nurse to do the psychiatric support that it was not possible for even if one wanted to do nurses. The nurses also expected to a liaison nurse to care for the patients with a psychiatric technical knowledge.

From the results, as for us, it became clear that both patients and nurses owned necessity of a liaison nurse. We got a suggestion about a role of liaison nurse from this investigation.

はじめに

現在、わが国では医療技術が高度に発達しているが、広井¹⁾が行った調査では96%以上の患者・医療者が病院における心理的サポートは不十分であると回答している。そのため、患者の不安に関する心理的サポートや、医師などへの要望や苦情を間に立って聞いてくれる者の存在、家族に対するサポートなどが求められている。このような必要性に応じて、患者・家族への心理的サポートやコンサルテーションの専門家であるリエゾン精神専門看護師（以下リエゾン看護師と記す）が活躍し始めている。

リエゾン看護師の活用を評価した研究では、患者や家族の精神的問題が明確になり、精神症状の改善や問題行動の減少などの効果がみられたと報告している。また、看護師の患者に対する共感的態度の高まりや看護集団のパフォーマンスの向上と組織の活性化につながったということも報告されている²⁻⁴⁾。さらに野末⁵⁾は、リエゾン看護師としての活動から、患者は包括的な医療への期待が高く、個別的な対応を望んでいると述べている。しかし、これらはいくまでリエゾン看護師を含め、看護師の視点からリエゾン看護師の活用による効果を言及したものであり、患者の主観的認識や評価について明らかにされたものではない。

一方、主観的評価である患者満足度調査では、患者の満足度を高めるためには患者の期待内容を把握してニーズを満たすサービスの提供が必要であるといわれている⁶⁻¹⁰⁾。そのため、患者自身のリエゾン看護師に対する必要性と期待する役割を明らかにすることは、患者が求めるリエゾン看護師のあり方を示す点から有意義であると考えた。

そこで本研究では、患者にとってのリエゾン看護師の必要性と期待される役割についての、患者と看護師それぞれの認識を明らかにすることを目的とした。

用語の定義

本研究では以下のように用語の定義をする。

- リエゾン精神看護：リエゾン看護師が、精神科領域の専門的知識・技術を、依頼を受けた他科病棟の看護師の知識・技術と連携して患者ケアを有効に展開することであり、医師など他の医療スタッフとの連携をも含む看護¹¹⁾
- 心のケア：患者との深い関わりや情動的触れあいを中心とした患者の立場に立ったケア¹²⁾

対象

A 大学附属病院各病棟に入院する患者476名、各病棟に勤務する看護師327名とした。ただし、リエゾン看護師の活動の場の中心が一般科であるため精神科の入院患者は除外した。また、年齢の下限を15歳とし小児科を除外した。さらに、疾患や治療により筆記でのアンケート回答が困難であるICU・HCUなどの患者は除外した。なお、看護師は患者との認識の比較を行うため、除外した患者のいる場所すなわち精神科病棟、小児科病棟、ICU・HCUに勤務する看護師を除外した。

方法

1. 調査期間

2006年8月14日～30日とし、そのうちの7日間を調査日とした。

2. 調査方法

患者・看護師のそれぞれに対し、調査対象者に
応じて内容が一部異なる無記名自己記入式の質問
紙を用いて行った。調査にあたり、リエゾン看護
師についての説明用紙を添付した質問紙を患者・
看護師に1部ずつ配布した。本調査の前には説明
用紙・質問紙の検討を行うため、予備調査を実施
した。

予備調査は、調査の目的を説明した上で協力の
得られた臨床経験のある本学看護科学領域修士課
程の学生8名と、A大学附属病院の患者9名に対
して行った。説明用紙には、リエゾン看護師の理
解のために、リエゾン看護師は特別な資格を持ち、
精神看護の知識と技術を用いて、患者が不安や悩
みを解決できるように働きかける看護師であるこ
とを明記した。また、リエゾン看護師の介入方法
を図で記載した。予備調査対象患者には、説明用
紙を読んでもらい、書かれている内容を理解して
いるかフィードバックしてもらった。その結果、
ほぼ全ての患者が説明用紙の内容でリエゾン看護
師について理解できたと判断した。そのため、本
調査では各病棟の師長に協力と同意を得て、対象
者に質問紙の配布を依頼した。質問紙の回収方法
は、各病棟に回収箱を設置し、調査期間終了後に
調査者が回収した。

3. 調査内容（質問紙項目）

質問紙の内容は①基本属性、②疾患・入院によ
る悩みや不安、③医療者による心のケアの必要性、
④病棟看護師の心のケアの現状、⑤病棟看護師の
心のケアの満足度、⑥リエゾン看護師に期待す
ること、⑦リエゾン看護師の必要性とした。患者に
は自分自身について、看護師には①④⑥の項目は
自分自身について、それ以外の項目については、
患者がどう感じていると思うかについて尋ねた。
質問紙作成の際には岡堂¹⁹⁾の、患者が取り組む適
応のための課題を参考にし、回答方法は2項・多
項選択法、自由記載法を用いた。

4. 分析方法

各調査項目との関連を見るためにそれぞれ単純
集計、クロス集計を行い比較した。統計解析に
はSPSS Ver.14.0J For Windowsを使用し、
Fisherの直接確率を用い、有意水準は1%とし
た。自由記載で得られたデータは研究者間でデー
タを読み返し、類似した意味をもつものに分類し
カテゴリー化した。なお、データが一部欠損して
いるものは、各回答で有効部分のみ活用した。

5. 倫理的配慮

調査にあたり事前に看護部長および各病棟師長

に、本研究の趣旨を文書と口頭で説明し了承を得
た。質問紙は無記名とし、個人が特定されないこ
と、回収した調査用紙は責任を持って保管し、プ
ライバシーの保護を厳守すること、得られた研究
データを本研究の目的以外では使用しないことを
文書にて説明し、質問紙への回答をもって研究参
加の同意を得たものとした。

なお、本研究は金沢大学医学倫理委員会の承認
を得て開始した。

結 果

対象者は患者476名のうち回答者346名(72.7%)、
有効回答343名(99.1%)、看護師327名のうち回
答者267名(81.7%)、有効回答267名(100.0%)
であった。

1. 対象者の属性

患者の年齢は15~85歳(56.0±16.0歳)であり、
性別は男性169名(49.3%)、女性173名(50.4%)、
不明1名(0.3%)であった。入院期間(平均±S
D)は1~425日(34.4±53.3日)であり、診療区
分(受診している診療科別)は外科系211名(61.6
%)、内科系90名(26.2%)、混合38名(11.1%)、
不明4名(1.2%)であった。

看護師の臨床経験年数は1~39年(10.3±9.6
年)であり、所属区分は外科系145名(54.3%)、
内科系79名(29.6%)、混合34名(12.7%)、不明
9名(3.4%)であった。

2. 患者・看護師のリエゾン看護師の必要性

1) リエゾン看護師の必要性

「必要である」と答えた患者は202名(68.5%)、
看護師は228名(93.4%)、「必要でない」と答えた
患者は93名(31.5%)、看護師は16名(6.6%)であ
り、患者より看護師において、リエゾン看護師の
必要性を感じる者が有意に多かった。

病気・入院してからの悩みや不安があると答
えた患者は257名(74.9%)であったのに対し、リエ
ゾン看護師が関わることになったら悩みや不安を
訴えると答えた患者の方が264名(77.0%)と多か
った。

2) 心のケアの満足度

現在病棟の看護師が行っている心のケアの満足
度では、「満足している」と答えた患者は232名
(67.6%)、看護師は18名(6.7%)、「満足してい
ない」と答えた患者は57名(16.6%)、看護師は
234名(87.6%)であり、看護師より患者が病棟
看護師の心のケアに満足している者が有意に多か
った。

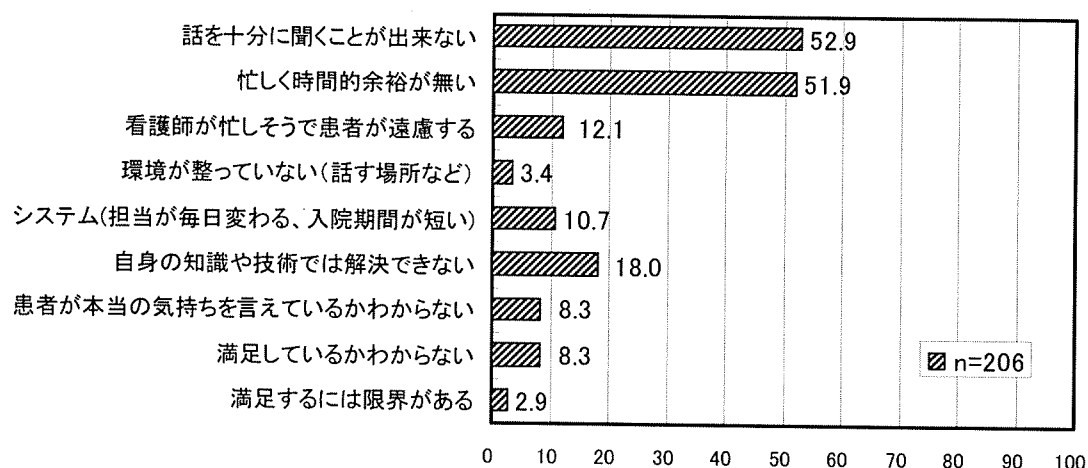


図1 看護師は患者がどのような点で心のケアに満足していないと思うか (自由記載)

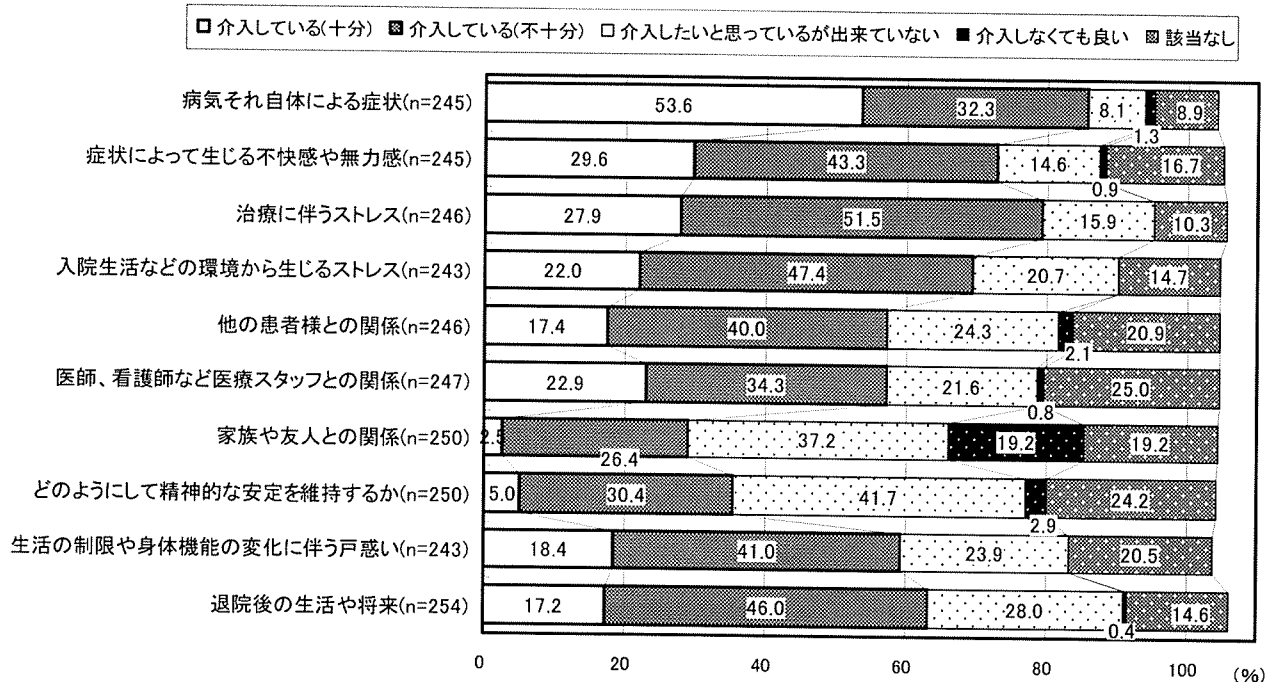


図2 看護師の患者への心のケアの介入状況 (複数回答)

「患者は心のケアに満足していない」と看護師が捉える理由として、自由記載による回答では、「話を十分に聞くことが出来ない」「忙しく時間的余裕が無い」が高い割合を占めていた。また、「自身の知識・技術では解決できない」「患者が本当の気持ちを言えているかわからない」などの回答があった(図1)。

3. リエゾン看護師に期待する役割

1) 看護師の患者への心のケアの介入状況

「病気それ自体による症状」「症状によって生

じる不快感や無力感」の項目は十分・不十分に関わらず介入している割合が70%以上であった。一方、「家族や友人との関係」、「どのようにして精神的安定を維持するか」の項目については、介入したいと思っているが出来ていない割合が高かったが、介入しなくてもよいと考えている割合も他項目に比べて高かった(図2)。

2) リエゾン看護師に介入して欲しい心のケアの内容

患者は「病気それ自体による症状」が最も高い

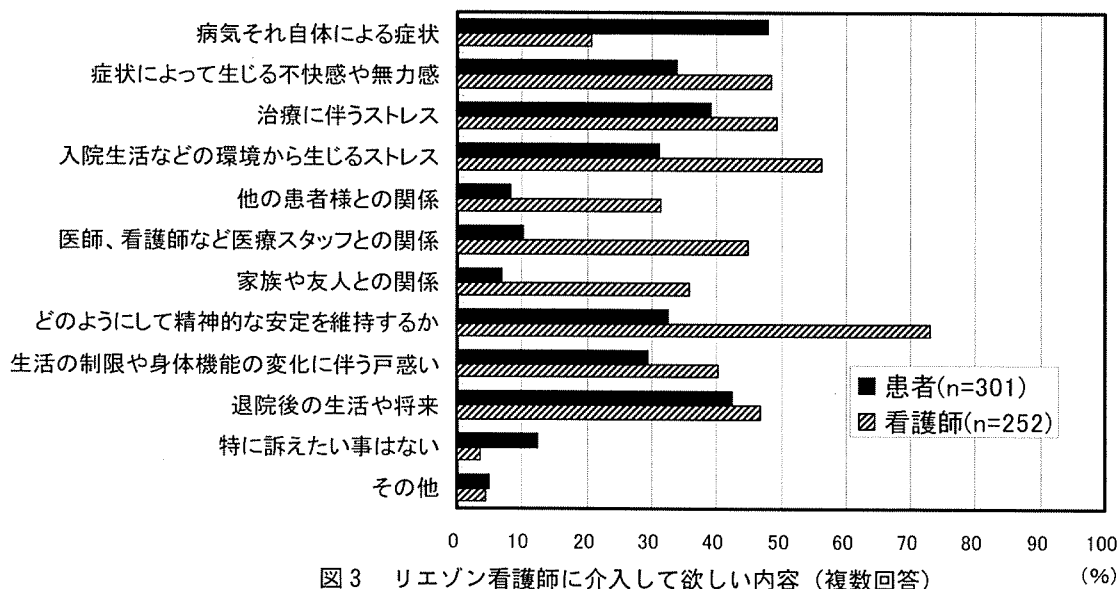


図3 リエゾン看護師に介入して欲しい内容 (複数回答) (%)

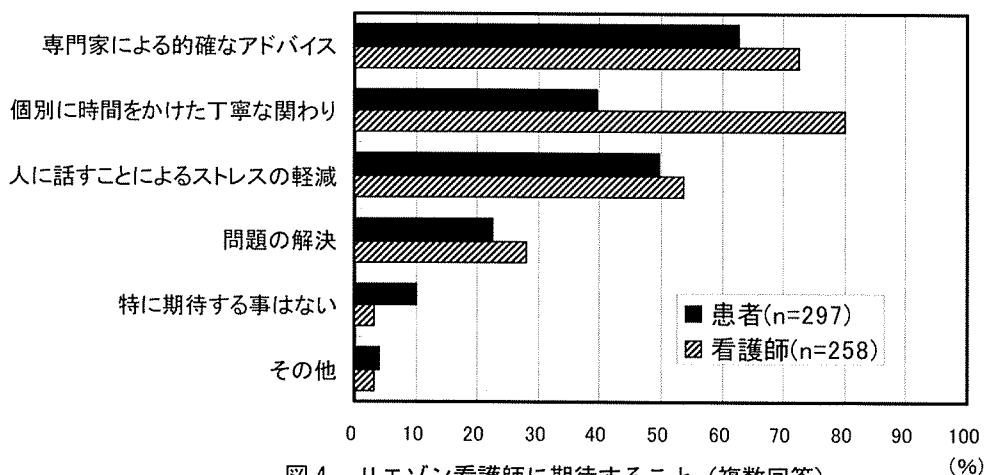


図4 リエゾン看護師に期待すること (複数回答) (%)

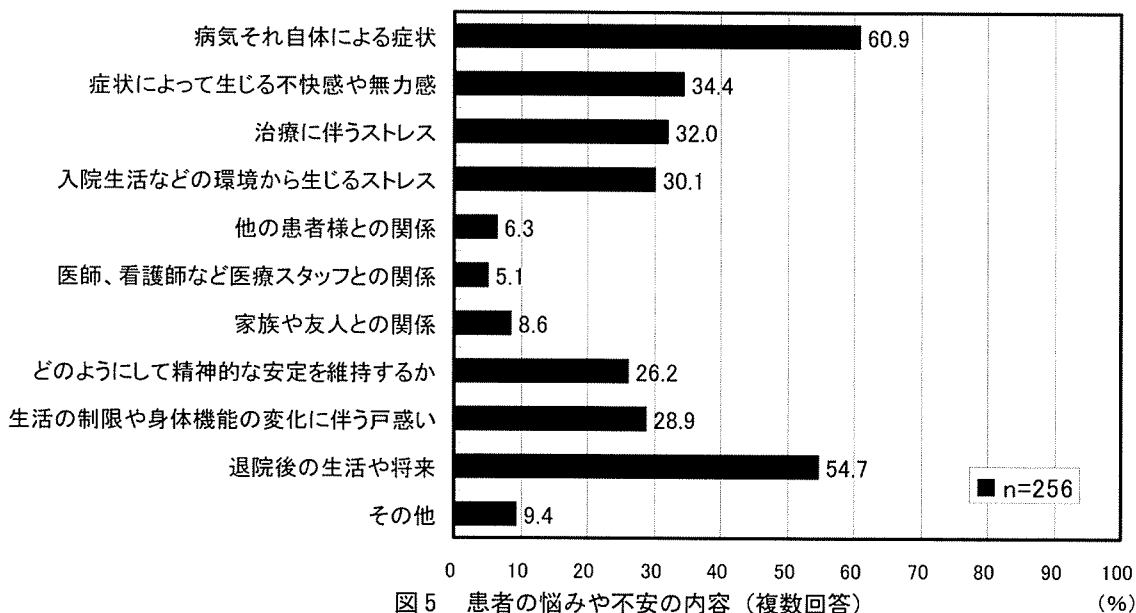


図5 患者の悩みや不安の内容 (複数回答) (%)

割合を示していた。看護師は「どのようにして精神的安定を維持するか」が最も高かったのに対し、「病気それ自体による症状」は最も低い割合を示していた(図3)。

3) リエゾン看護師に期待する役割

患者は「専門家による的確なアドバイス」が最も高く、次いで「人に話すことによるストレスの軽減」、「個別に時間をかけた丁寧な関わり」、「問題の解決」の順であった。看護師は「個別に時間をかけた丁寧な関わり」、「専門家による的確なアドバイス」の2項目が高かった(図4)。

4) 患者の悩みや不安の内容

「病気それ自体による症状」、「退院後の生活や将来」の2項目が高い割合を示していた(図5)。

考 察

1. リエゾン看護師の必要性

リエゾン看護師が「必要である」と答えた看護師は93.4%、患者は68.5%と差はみられたものの、患者・看護師ともにリエゾン看護師を必要としていることが明らかとなった。また、リエゾン看護師が関わることになった場合、多くの患者がリエゾン看護師に不安を訴えたいと思っていた。このことから、リエゾン看護師を活用したいと思う患者が多いことがわかり、リエゾン看護師の必要性が示された。

リエゾン看護師を必要としている看護師が多かった理由として、看護師では87.6%が、自身の心のケアでは患者が満足していないと捉えていることが関係していると考えられる。さらに満足していない理由では、「話を十分に聞くことが出来ない」、「忙しく時間的余裕が無い」という意見が半数を超えていた。先行研究において、時間と人員の不足を感じている看護師ほど心のケアの満足度が低いと報告されている¹⁴⁾。このことから、看護師は自身の心のケアに満足していないと認識していることが、リエゾン看護師の必要性の高さにつながっていると考える。また梶本ら¹⁵⁾の調査では、看護師は心のケアの阻害要因として、カウンセリング技術の不足を認識していた。本研究においても、患者が心のケアに満足していないと捉える理由として「自身の知識や技術では解決できない」、「患者が本当の気持ちを言えているかわからない」の2項目があがっている。これより、心のケア技術への自信のなさを認識していることも、リエゾン看護師の必要性を高めていると考える。

一方患者は、現状の心のケアに満足しているに

も関わらず、リエゾン看護師が必要であると答えていた。広井¹⁾の調査では、心理的・社会的サポートにおいて重要と思われる職種は、看護師よりも、職務関係以外の専門相談員、臨床心理士などの心理専門職が多くあげられていた。この理由として、病院とは直接かかわりが無い、第三者的な相談機関ないし相談者の充実が図られるべきという意見があげられている。このように患者は、心のケアの専門家や、第三者的な存在を求めている。したがって患者は、看護師の心のケアには満足していたが、リエゾン看護師の必要性が高いという結果になったと考えられる。

2. リエゾン看護師に期待する役割

看護師による患者への心のケアの介入状況では、症状・治療に関する項目は十分・不十分に問わず介入している割合が高かった。しかし、「家族や友人との関係」など人間関係に関する項目や「どのようにして精神的安定を維持するか」の項目では、介入したいと思っているが出来ていない割合が高かった。また看護師は自分の行う心のケアに対し患者が、「話を十分に聞くことができない」、「忙しく時間的余裕がない」、「自身の知識や技術では解決できない」という点で満足していないのではないかと考えていた。看護師がリエゾン看護師に介入して欲しい心のケアの内容では、「どのようにして精神的安定を維持するか」の項目が最も高く、「病気それ自体による症状」など疾患に関する項目は低い割合を示していた。さらに看護師がリエゾン看護師に期待する役割では、「個別に時間をかけた丁寧な関わり」や「専門家による的確なアドバイス」が高い割合を占めていた。このことから、看護師は業務の煩雑さをかいくぐって、疾患に関する心のケアを重視して取り組んでいることが明らかとなった。しかし、その一方で業務の煩雑さや自分自身の知識・技術不足から患者や家族などと十分な関わりができないなど、介入できる部分をせばめ、介入したくてもできない状況をつくっていると考えられる。宇佐美ら³⁾はリエゾン看護師を活用した看護師からの主な依頼理由は、患者へのケアの方向性を見出せず困難を感じ、ケアの方向性と具体的な方法を見つけたいというものだったと述べている。これは、知識・技術不足により介入できない心のケアにリエゾン看護師を求めている本研究結果と一致している。以上のことから、看護師は介入したくてもできない部分の心のケアに介入して欲しいという思いが強いといえる。そして、専門的知識・技術

を用いた丁寧な関わりをリエゾン看護師に期待していると考えられる。

患者がリエゾン看護師に期待する役割では、患者は実際に「問題の解決」をすることよりも、「専門家による的確なアドバイス」や「他の人に話すことによるストレスの軽減」をリエゾン看護師に求めていることがわかった。広井¹⁾の調査でも、臨床心理士や病院外の専門相談員は看護師よりも、心理的・社会的サポートを求められていた。そのため、患者は心のケアの専門家を求めているといえる。しかし、「病気それ自体による症状」については85.9%の看護師が心のケアとして介入しているにもかかわらず、患者の悩みや不安の内容ではそれが最も多くなっていた。またリエゾン看護師に介入して欲しい内容でも最も高い割合を占めていた。以上のことから、患者は心のケアの専門的知識と医学的知識双方からの精神的なサポートをリエゾン看護師に期待しているといえる。

以上より、患者・看護師共にリエゾン看護師の専門的知識・技術に対する役割を期待していることが明らかとなった。しかし、看護師では患者の疾患に関する悩みや不安など介入できている部分よりも、自己の知識・技術不足や時間的制約から介入したくてもできない部分にリエゾン看護師の介入を求めている。また、リエゾン看護師には患者に対する個別的な丁寧な関わりを期待していた。それに対し患者は、最も不安や悩みに感じている疾患に関する部分にリエゾン看護師の介入を求めている。したがって、患者と看護師におけるリエゾン看護師に期待する役割の認識に差があったといえる。このことから、リエゾン看護師は、疾患に関する知識を十分に備え、患者・看護師、両者の期待する役割に応える活動をする必要がある。先行研究では、リエゾン看護師への依頼件数は看護師が最も多いと報告されている¹⁶⁾。そのため、患者がリエゾン看護師を依頼しやすい環境を整えることも重要であると考えられる。

まとめ

1. リエゾン看護師の必要性は看護師の方が強く感じているが、患者・看護師ともに必要と感じていた。
2. 患者は、疾患に関する悩みや不安を多く持っており、心のケアの専門的知識と医学的知識双方からの精神的なサポートをリエゾン看護師に期待していた。
3. 看護師は介入したくてもできない部分の心の

ケアにリエゾン看護師に介入して欲しいという思いが強く、専門的知識・技術を用いた丁寧な関わりを期待していた。

研究の限界と今後の課題

本研究の調査では特定病院の限られた対象から得られた結果に基づくものであり、本結果を一般化することには限界がある。今後、他施設等でも同様の調査を行い、対象数を増やすことにより、今回の結果の妥当性についてさらに深く検証していくことが必要ではないかと考える。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、快く調査に御協力下さいましたA大学附属病院の患者様、看護師の皆様、看護部長様、本学看護科学領域修士課程の皆様にご心より感謝し、厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は、看護実践学会平成19年度共同研究チーム「リエゾン精神看護と研究」により行った研究の一部である。

文 献

- 1) 広井良典：患者に対する心理的・社会的サポートの経済評価，社会保険旬報，2111，14-17，2001
- 2) 岡谷恵子，野末聖香，川名典子，他：日本における CNS 等の機能とその役割についての研究，平成9年度厚生省看護対策特別事業研究報告書，1998
- 3) 宇佐美しおり，野末聖香，片平好重，他：精神看護専門看護師の活動成果に関する研究－直接ケア技術とコンサルテーションの機能に焦点をあてて－，臨床看護，31(11)，1622-1631，2005
- 4) 野末聖香，宇佐美しおり，福田紀子，他：精神看護専門看護師によるコンサルテーションの効果，看護，56(3)，70-75，2004
- 5) 野末聖香：専門看護婦の導入は病院を変える－リエゾン精神専門看護師の実例－，看護管理，7(5)，326-333，1997
- 6) 清水真由美，高橋玲子，平山敦子：入院患者満足度調査を指標とした接遇向上への取り組み，日本看護学会論文集（看護総合），37，260-262，2006
- 7) 仁木ひろみ，佐々木恵，田中ひろみ，他：看護の質の評価－患者満足度調査と看護婦アンケートより－，日本看護学会論文集（看護管理），

- 29, 244-246, 1998
- 8) 吉田啓子, 貝阿彌由香, 今中美津江: 2年間の患者満足度調査の比較 患者満足度調査から看護サービスの改善をめざして, 全国自治体病院協議会雑誌, 45(7), 997-1000, 2006
- 9) 坂智英子, 末廣純子, 日浦美也子, 他: 受け持ち看護師に対する入院期間別患者満足度調査の比較, 日本看護学会論文集(看護総合), 36, 195-196, 2005
- 10) 塚本よし子, 曾根一子, 丸林せつ子, 他: 病棟看護における患者満足度調査, 藤枝市立総合病院学術誌, 8(1), 47-50, 2002
- 11) 長谷川雅美: リエゾン精神看護, 吉田佳郎, 平澤久一, 長谷川雅美編: 精神疾患・身体疾患の併発と看護, 医学書院, 187-193, 東京, 2001
- 12) 松末 智: はじめに~医療を取り巻く環境の変化, 新納京子, 向島伶子編: 患者と家族のための心のケア, 医薬ジャーナル社, 10-18, 大阪, 1996
- 13) 岡堂哲雄: 看護の基礎としての臨床心理, 岡堂哲雄, 内山芳子, 岩井郁子, 他編: 患者ケアの臨床心理, 医学書院, 1-24, 東京, 1978
- 14) 辻本真由美, 筒口由美子: 看護者のこころのケア満足度に関する研究, 富山医科薬科大学看護学会誌, 3, 9-18, 2000
- 15) 梶本市子, 畦地博子, 梶原和歌, 他: 「こころのケア」に関する看護婦の認識, 高知女子大学紀要看護学部編, 48, 59-69, 1998
- 16) 白井教子, 山本賢司, 宮岡等: チーム医療によるコンサルテーションリエゾン精神医療ーリエゾナーズの役割ー, 臨床精神医学, 36(6), 715-719, 2007